

近年になって、世界のいたる所で発生している様々な国際問題の背景には、間違いなくその国や国家間の歴史が存在する。ほぼ全員の京大生が、小中高と、時には受験科目として、この歴史の勉強をしたはずだ。しかし今、これらの諸問題を、授業で習った「歴史」の知識からきちんと理解できているだろうか？ 現在起こっている問題については、学校に限らず、テレビやネット、新聞などからも浪山の情報が得られる。しかし、そうした情報から、現代に潜む問題の本質に近づくための教養を身に付けるのは、なかなか大変なことである。

そこで、近現代に起こった重要な出来事をよりリアルに理解し、思考の糧にしていくための取っ掛かりとして、この「教科書が教えられない政治学 現代史スペシャル」をお薦めする。この本はアメリカ建国（1776）から2004年※までに世界中で起こった戦争、政治変革、社会のパラダイムシフトを、1つ1つトピックにして扱っている。どの項目の内容も、

※最後のトピックは「新潟県中越/スマトラ島沖地震」

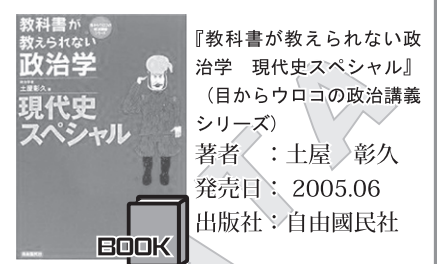
教科書が教えられない政治学  
現代史スペシャル



その渦中にいた人間の思想と行動理念をリアルに感じ取れるほど洗練され、かつ充実している。それでいて文章はユーモアに溢れていて、文字の多さに飽きることなくスラスラ読める。高校までに習った授業の現代史が、人物や年号を記号化して、小奇麗に整理した程度のものに見えてしまう。そう感じるほどに、この本は現代史の内容を丸々覚えるためではなく、丸々理解するためにある本——“大

学生のための教科書”として役に立つだろう。

大学に入って“歴史”の授業は強制でなくなり、全く受けないことも、好きな1地域の史学を掻い摘んで受けることも、自由に選択できるようになった。しかしここで今一度、今までの授業の“歴史”よりも高い視点で現代史の全体像を知るための“教科書”を読んで、現代史の再勉強をしてみたいはかがだろうか。



本書は「政治学」と銘打っているが、これは現代史を政治的視点から解説している本で、どちらかと言えば政治学より歴史学の本という意味合いが強い。



無 実の死刑囚を救え——。犯罪者の社会復帰を助ける職務に失望しているベテラン刑務官・南郷正二と、傷害致死による2年の刑期を終えたばかりの内気な青年・三上純一。2人がコンビを組んで引き受けた「仕事」、それは10年前に起きた強盗殺人事件の犯人として死刑執行を待っている樹原亮という男の冤罪を証明するというものだった。匿名の依頼人は高額成功報酬を約束しているものの、期限はわずか3ヶ月の困難な仕事である。しかし三上は、自分が死なせた男の遺族への賠償に家族が苦しんでいる状況を思い、この仕事を引き受ける。果たして2人は樹原を救い、報酬を手にすることができるのか——。

『13階段』はミステリー小説の栄誉である江戸川乱歩賞（第47回、2001年）に宮部みゆきら審査員が満場一致で選出した傑作である。2003年には反町隆史や山崎努をはじめ豪華俳優陣で映画化もされている。

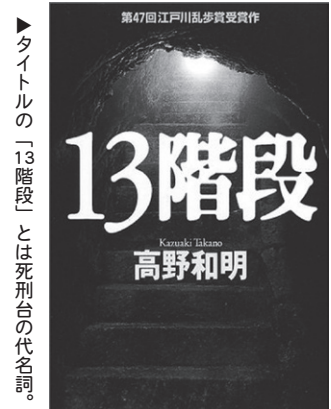
ミステリーとしての面白さについては

言うまでもない。2人が引き受けた期限付きのミッションという主軸もさることながら、10年前の事件の調査に複数の事情が絡み、全く予想外の方向へと進むストーリー展開からは最後まで目が離せない。特に、驚きの結末に向けて加速する終盤は大興奮間違いなしである。

これだけでも十分だが、「1回読んだら終わり」のミステリーと決定的に違うのは、登場人物の克明な心理描写を通じて、現行の法律や死刑制度の問題点を浮き彫りにしている点である。南郷がかつて刑務官として2人の犯罪者の死刑執行に立ち会った過去を生々しく語る第4章「過去」、そして無口な三上が「法律は正しいのですか」と南郷に手紙で思いをぶつける終章「二人がやったこと」、この2つの部分こそが本作品の醍醐味と言っても過言ではないだろう。

13階段 BOOK

高野和明 / 講談社



タイトルの「13階段」とは死刑台の代名詞。

私たちが当たり前営む日常生活の裏に社会矛盾は潜んでいる。法律や司法制度について考える機会が少ない人にこそ『13階段』をお薦めしたい。（孟徳）

はみだし  
すてーじ

ちょっとくらいはみだしても見逃して下さい。  
⇒見逃してますよ。

（理・2 敗者）  
（「ちょっとくらい」……？；編）